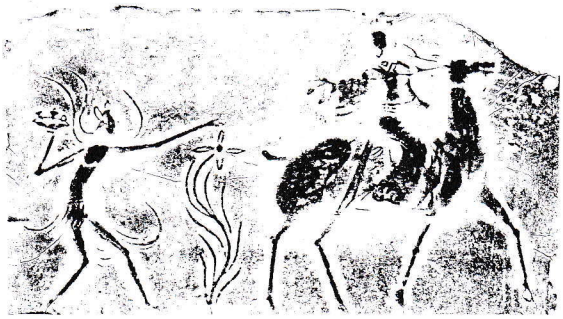

大分県書道　令和７年１月号　No.４１５

２０２４年秋、あれこれ

会長　松　嵜　典　孝
（六郷）

夏に続き、この秋も暑かった。そして、遅かった。ヒガンバナは今年は開花しないかと思っていたが、十月になって二週間遅れとなった。

県美展、毎日展九州展、西日本書美術展審査会など、いつもの年と変わらない秋であったが、時間に少し余裕がとれたこともあり、久しぶりの上京も楽しんだ。東京では出羽海部屋の訪問と寄席を楽しむことがいつものことである。今回は、新宿末廣亭。十月下席、正午からの昼の部に続き夜の部まで堪能。外は雨の寒い日であったが、場内は満員。ここでしか味わえない桟敷席へ。権太楼、桃花、歌武蔵と豪華メンバー。昼の部のトリは文菊。夜の部では市馬が貫禄の絶妙な話術、小満んに続き、大トリは一之輔。古典落語の定番、時そばを披露。30分間時事ネタもからめて、満員の観客は一之輔の世界を満喫。

若手の力士を招待して激励会も。草地の春日神社に参拝し、特別養護老人ホーム真寿苑を慰問。入所者と握手したり、ハグしたり。涙をうかべる方も。引退して世話人として相撲協会に勤務することになった海龍が車を運転。本場所中の十日目、新宮の出羽海部屋九州宿舎を訪ねた。宿舎では、力士の髷（まげ）を結う「床山」の「床力（とこりき）」も熟練度が増してきた技を見ることができた。会場は超満員の熱気。十日目は家族も連れての本場所見物となった。

暑さと雨で大失敗に終わった干柿づくりは再度挑戦。今度は順調である。やはり気温が下がらないとどうしようもならない。海からの北風も相まって赤い色も増してきている。

みかん類も色づいてきた。小坂奇石先生は徳島出身でスダチの話をよく耳にしていたので、我が家でも三本ほど育てている。黄色から朱色に少し加わってきたので収穫。小坂先生のである法楽寺へ御供に送る。カボス、ユズ、ダイダイなどに加え、温洲やバンペイユなどみかん類を所せましと植えている。みかんは年中を通して緑が絶えないし、花や実など楽しめるからである。

県学校書写教育研究大会にも参加した。今日はオンラインによる講演も実施。一時間弱の与えられた時間、文字を正しく書くという原理について具体的な文字を通して研修する機会を得た。そして、第７回書道チャンピオン大会の予選大会審査会。決勝大会に向けて出品数と作品の内容に手応えを感じた。

２０２５年１月12日、決勝大会で新年を迎えることになる。皆さんも、よいお年をお迎えください。